時評

佐藤洋一郎　総合地球環境学研究所副所長・教授

東京のキー局

朝のテレビ番組をみていると、各局とも東京のキー局のキャスターがさかんに、汐留、台場など、キー局のある地名を連発する。「ここ汐留では…」といった具合である。なるほどそれは、東京住まいの人には関心事の一つかもしれない。だが、地方にいると、汐留も台場も、もう一つぴんと来ない。私など、台場は幕末の大砲の置かれていたところ、という一般名詞であると、つい最近まで思っていたほど、東京の事情にはうとい。

とにかく、地方に住む私には、台場も汐留も東京の一部にすぎないのである。そしてそれは、私が銀閣寺のある左京区から金閣寺近くの右京区に引っ越したとして、東京の私の知人にとっては京都市内で引っ越したにすぎないと思うのと同じようなことなのだ。

二つの顔の使い分けを

それでも、事情はだいぶよくなったのかもしれない。以前は、京都は大雨なのに、今日は晴天の一日でしたなどと、平然と言ってのけたキャスターもいたらしい。おそらく沖縄や北海道の視聴者は、私以上に違和感をもっていたに違いない。それでもまだ、天気予報担当者の中には、「今日の東京は暖かでした」などと言う人がいて呆れることがある。東京とわが地を比べるにはよい、という肯定的な意見もあるかもしれないが、比較の対象が東京でなければならない理由はみあたらない。

キー局には、二つの顔がある。ひとつは東京やその近郊という一つの地方の放送局という顔だ。そこではなるほど、汐留と台場の違いは意味をなすかもしれない。だがキー局には全国を対象としたネットの代表局としての顔もある。この場合、キー局は、首都にある局なのであり、視聴者は全国に散らばっている。そして彼らには、「汐留」と「台場」を特定する意味はほとんどない。キー局のキャスターたちには、二つの顔の上手な使い分けが求められているのだと思う。

中には、「東京のことは全国の関心事」「東京を知ってもらって損はない」といった考えもあるかもしれない。だが地方の人間が知るべきこと、知りたいことは、首都としての東京で起きたこと、全国のレベルで起きていることなのだ。

一地域としての東京での出来事は、他の地域での出来事とまったく同格なのだということを、一地域の一住民としては言っておきたいと思う。

執筆者略歴

◇さとう・よういちろう氏　京都大学大学院農学研究科修士課程修了。静岡大助教授を経て2008年10月から現職。植物遺伝学専攻。著書に「稲の日本史」（角川書店）「コシヒカリより美味い米」（朝日新書）など。